



### (1) 緑友ハーモニー26年度運営体制

幹事長: 小林 力 (5回生)

幹事楽譜係: 岡真理子 (14回生)

幹事会計係: 清水あつ子 (14回生)1

パートリーダー: 矢島多恵子 (ソプラノ)、佐藤睦子 (アルト)

河野通久 (テナー)、上田昌紀 (バス)

### (2) 今後の練習日程

1月16日 (金)	13:00 ~ 15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
1月16日 (金)	15:30 ~ 16:30	ミニ総会: 中央町社会教育館・102号研修室
1月23日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・レクホール (本館3階)
2月20日 (金)	13:00 ~ 15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月20日 (金)	15:30 ~ 16:30	話合い 緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)
2月27日 (金)	10:00 ~ 12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室 (別館2階)

3月6日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
3月13日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
4月17日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
4月24日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月8日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
5月22日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
6月12日(金)	10:00～12:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
6月19日(金)	13:00～15:00	緑ヶ丘文化会館・第11研音楽室(別館2階)
7月10日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
7月24日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
8月14日(金)	お盆休み	
8月28日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
9月11日(金)	10:00～12:00	中央町社会教育館・レクリエーションホール
9月25日(金)	13:00～15:00	中央町社会教育館・レクホール 押見先生ご指導
10月9日(金)		
10月16日(金)		
10月30日(金)		
11月6日(金)		
11月13日(金)		
11月20日(金)		
11月27日(金)	午前	リハーサル 小山台会館2階音楽室
11月27日(金)	午後	コンサート 小山台会館3階大ホール
12月4日(金)	11:30～14:00	コンサート打ち上げ/クリスマス会 奥沢 NaKaMa

註1: 表中下線の日は奇数週金曜日です。ご注意ください。

註2: 今年もコンサートを小山台会館で開催します。

註3: 10月、11月はコンサートに備えて月3回の練習になります。

註4: 今年のクリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて12月第1金曜日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

### (3) コンサートとクリスマス会

今年もコンサートを開催します。日時は11月27日午後、会場は昨年ミニコンサートを開催した小山台会館3階大ホールです。曲目の中ではヴィヴァルディの見た日本の四季が目玉で、ヴァイオリン奏者も加わってくださるそうです。

クリスマス会はコンサートの打ち上げを兼ねて、通常より1週間早めて12月の第1金曜日4日に奥沢のイタリアン・レストラン NaKaMa で開催します。

### (4) 6月号のひまつぶし ミュンヘン・ゲルトナープラッツ州立劇場管弦楽団 小林 力

5月7日に日本では滅多に聴けない ミュンヘン・ゲルトナープラッツ州立劇場管弦楽団のブラームスの演奏をみなとみらいホールへ聴きに行った。全くの偶然だが、5月7日はブラームスの誕生日(生誕193年)なのだ。ちなみに、前回のひまつぶし「大原れいこメモリアル特別ギャラリーコンサート」の日付が間違っていたので、ここで訂正させていただく。6月19日ではなく4月19日だ。「カルテットという名の青春」という映画を観たの6月5日。

さて、曲目は、ワーグナー: 歌劇「ローエングリン」より第3幕への前奏曲、ブラームス: ヴァイオリン協奏曲ニ長調Op.77、ブラームス: 交響曲第1番ハ短調Op.68。指揮は ミヒャエル・バルケ、ヴァイオリン独奏は服部百音(Mone)である。

ブラームスのヴァイオリン協奏曲は5大協奏曲、ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキー、メンデルスゾーン、ブルッフの1番の一つである。この協奏曲を生で聴いたのはもう何年前になるか記憶も定かではない。5つの協奏曲に共通している点は冒頭の出だしが印象的なメロディーではじまることだ。ブラームスの場合、ゆったりとした第1主題(下のヴィオラの譜例参照)がヴィオラ、チェロ、ファゴットにより演奏され、オーケストラが力強く提示する。



冒頭の出だしの中でも最も印象的なのはブルッフの1番のヴァイオリン独奏部分だが、この曲は来月ドレスデン・フィルと榎本大進のヴァイオリンで聴くことになっているので、緑友ハーモニー7月号のひまつぶしで詳しく述べることにしよう。

ブラームスがヴァイオリン協奏曲を書いたのは、息詰まるような大曲 交響曲第1番を満を持して世に問うたあと、解放されたように伸びやかな交響曲第2番を書き上げ、充実した作曲活動を展開していた時期である。初演は1877年1月1日、当代随一のヴァイオリニスト ヨーゼフ・ヨアヒムの独奏、ブラームス自身の指揮でライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の演奏で行われた。

第1楽章は24分を超える壮大な楽章である。ブラームスはカデンツァを書いていないので、ヨアヒムをはじめクライスラーなど多くの演奏家、作曲家が書いているが、圧倒的にヨアヒムのものが演奏される。服部百音もヨアヒムのカデンツァを使った。カデンツァの後は第1主題に基づくコーダで独奏ヴァイオリンが静かに奏でるが、徐々に速度と力を増しながらまるで交響曲のフィナーレのように力強く結ばれる。

第2楽章アダージョは管楽器による合奏で始まり、オーボエが魅惑的な主題（下記譜例参照）を長々と奏でる。独奏ヴァイオリンがこの旋律を引き継ぎ装飾的に奏でたあと、中間部はヴァイオリンが憧れを切々と訴える「ヴァイオリンによるコロラトゥーラのアリア」と評される部分である。ブラームスの哀愁に満ちた美しい楽章である。



第3楽章は、第1主題（下記譜例参照）が3度の重音奏法の熱狂的な主題で、この楽章の重要なモチーフである。このパッセージがブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番第3楽章に似ていることが指摘されていて、確かにそのとおりだが、果たしてブラームスがブルッフの1番を知っていたかどうか、知っていたとしてもその影響を受けたかどうかは定かではないが、あり得ないことではない。



この主題を操作していくうちやがて第1副主題が再現される。再び冒頭主題が戻ると続いて短いカデンツァとなる。これにオーケストラが順次加わっていき結尾へと移る。最後は低弦のピッツィカートに乗せて独奏ヴァイオリンが主要主題による和音を静かに奏で、休符をはさんでオーケストラが力強くフィナーレを飾る。

服部百音は小柄で痩せ型だが、ヴァイオリンの演奏は鬼気迫るものがある。第1楽章のシンフォニックなオーケストラにも埋もれない力強さ、第2楽章のオーボエの美音にも負けない高音の美しさ、第3楽章で要求される超絶技巧と多彩なわざを披露した。

この服部百音だが、申し分のないクレデンシャル持っている。1999年生まれの26歳。5歳よりヴァイオリンをはじめ、8歳でオーケストラと初共演し、2009年にポーランドでのリピンスキ・ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールで史上最年少第1位並びに特別賞を受賞、本格的な演奏活動をはじめ。2013年にはヤング・ヴィルトゥオーゾ国際コンクールでグランプリ、新曲賞を受賞。また同年開催のノヴォシビルスク国際ヴァイオリンコンクールでは13歳でシニア部門に飛び級エントリーし、史上最年少グランプリを受賞。2015年にはボリス・ゴールドシュタイン国際コンクールでグランプリを受賞するなど、枚挙にいとまがない。現在はN響、読響、東フィル、東響、日フィルをはじめとする数々の著名オーケストラ、指揮者と共演を重ね、海外でも様々な演奏活動を行っている。2021年より桐朋学園大学音楽部大学院に進学、さらに研鑽を積んでいる。使用楽器は日本ヴァイオリンより特別貸与のガアルネリ・デル・ジュスである。

さて、後半のブラームスの交響曲第1番は数えきれないほど生演奏で聴いているが、聴くたびに感動する。ドイツのオーケストラは皆ブラームスを得意としていて、このオーケストラも例外ではないだろう。欲を言えば、第1楽章冒頭の弦、殊に第1ヴァイオリンにもう少し迫力がほしかったこと、第4楽章のホルンの独奏はもっと朗々と奏でてほしかった。しかし、オーボエやクラリネットの木管群は素晴らしかった。それにしても、暗譜派の私に言わせれば、指揮者のミハエル・バルケにはブラームスの1番くらいは暗譜で振ってもらいたいものだ。

実はこのオーケストラ、160年もの伝統を誇る由緒ある楽団なのである。ノイシュヴァンシュタイン城を造ったルードヴィッヒ2世が1865年に建てさせた劇場のオーケストラとしてはじまったが、地方のオーケストラのため、比較的知名度と評価が低くドイツでいうAランク(ドイツではオーケストラがAランクからDランクまでに格付けされている)として認められたのは2003年になってからである。無論Aランクの中でも、ベルリン・フィルを筆頭に、バイエルン放送交響楽団、ブラームスのヴァイオリン協奏曲を初演したライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団などは給与もダントツで高く別格扱いだ。Bランクは地方都市のオーケストラが多く、ミュンヘン・ゲルトナープラッツ州立劇場管弦楽団も長いことBランクだった。Aランクになったからといっても、Aランク上位のオーケストラとはかなり差があるのは否めない。